

# 文化史の授業改善 — 浮世絵の授業を通して —

早川 明夫

(文教大学教育研究所)

## Improvement of Instruction on the History of Culture : The Attention of Japanese Woodblock Print in Teaching

HAYAKAWA AKIO

(Institute of Educational Research, Bunkyo University)

### 要 旨

小・中・高・大の校種を問わず、一般的に歴史の授業において文化史を扱うのはむづかしいとよくいわれる。そのおもな要因のひとつが、教科書の文化史関係のページに羅列された人名・作品名・用語などの多さである。いきおい授業は、知識注入型に陥りやすくなる。そこで本稿では、単調になりやすい文化史の授業を浮世絵の授業によって改善するとともに、浮世絵に対する誤った知識や見方を修正したい。

### 1. はじめに

私の担当科目のひとつが、「日本文化史」である。前述のように、文化史を苦手とする学生は多い。文化史嫌いは、歴史嫌いを生み出している大きな要因となっている。受講生の多くが、教員志望であることを考えると、受講生が追試したくなるような授業を紹介したい。

15時間で日本文化史を終えることは不可能に近い。そこで、基本的にはひとコマで一時代一テーマの授業を行っている。たとえば縄文時代であれば「土器は人びとにどのようなめぐみをもたらしたか」、弥生時代は「戦争はいつ始まったか」というようにである。つまり、縄文時代は土器を通して、弥生時代は戦争をキーワードにしての授業展開となる。江戸時代の授業では、江戸時代を代表する、というより日本を代表する「美術」の浮世絵を取り上げ、「浮世絵の制作と見方」という

テーマで授業を行った。

それでは、なぜ浮世絵を扱ったのか。以下おもな理由を挙げる。

(1) 浮世絵は、化政文化の特色を如実に表しているから。

化政文化は、「江戸町人を中心に開花した文芸・歌舞伎・浮世絵などの各分野にわたる文化活動の総称」<sup>1)</sup>である。浮世絵の場合、版元(出版社)・絵師・彫師・摺師いずれも大半は町人で、主な買い手も町人であった。「庶民が文化創造の主流となると同時に、庶民が集団的に文化を受容するようになる」<sup>2)</sup>という好例である。

(2) 児童・生徒にとって、もっとも身近な絵画であるから。

浮世絵は、数多くの切手の図案となっている。年末には浮世絵のカレンダーが店頭で見られる。美術館や博物館などに出かけると、浮世絵をよく目にする。小・中・高

の歴史書の教科書を見ても、もっとも数多く掲載されている絵画が浮世絵である<sup>3)</sup>。図工や美術の教科書でも浮世絵は登場する。

(3) 日本を代表する「世界でもっとも有名な日本美術」<sup>4)</sup>であるから。

欧米には、現在でも浮世絵のコレクターが数多くいるという。大英博物館やボストン美術館、シカゴ美術館など海外の美術館や博物館にも多くの浮世絵が所蔵されている。

(4) モノ（浮世絵）を用いての授業が展開できるから。

一般に実物教材（モノ）を活用した授業は、生徒に大きなインパクトをあたえることが多い。とくにモノ教材が児童・生徒のくらしや体験・好奇心と連結した場合はなおさらである。モノ教材を取り入れた授業は、生徒の興味・関心を引き出し、考える素材を提供する。浮世絵の場合、本物なら安い物で一万数千円、復刻版画なら3～4千円で購入できる<sup>5)</sup>。いずれも入手が困難であれば、ほとんどの図書館にそなえてある大判の浮世絵全集を使用するだけでも生徒は反応する。

(5) 小中学校時代の版画の授業とリンクさせて理解できるから。

学生のなかには、図工や美術の授業のときに版画制作を体験している。つまり、自分の体験と結び付けて授業を受けることになるわけであるから、浮世絵に対する興味や関心は募る。とくに自分の体験と異なると、一層関心が高くなる。たとえば、彼ら、彼女らが学んだ版画は、すべてひとりで制作したが、浮世絵版画は絵師・彫師・摺師三者の協働作業によって作られる。

(6) 「図画工作」「美術」科の教員とのジョイント授業ができるから。

浮世絵や版画については、図工や美術の授業でも扱われている。そこで、社会科の教員と美術科の教員とでジョイント授業を

展開できる<sup>6)</sup>。この授業により、社会（美術）の授業とは異なる見方や考え方（多面的・複眼的な見方）を新たに発見できるかもしれない。

以上のようなおもな理由で、「浮世絵の制作と見方」というテーマで授業を行なった。授業後には、授業に関するコメントを学生に書いて提出してもらい、その後の授業改善に役立たせている。浮世絵の授業を通して、学生の浮世絵に関する知識や見方を知ることができた。共通項の多かった内容のコメントを一部紹介するとともに、その分析から明らかになったことを次に述べる。

## 2. コメントの分析からわかったこと

### 〈コメントA〉

浮世絵はずっと芸術品だと思っていたので江戸時代は実用品で、しかも手軽に買えるものだと思って驚きました。そして、絵を描く人が、版木を彫ったり、色をつけたり全てやるのだと思っていたので、絵師・彫師・摺師の三者の存在を初めて知りました。3人の力が合わさって一つの作品ができるのだから、絵師だけでなく、彫師や摺師の名前も覚えていいと思った。 (K, S 2年)

### 〈コメントB〉

今まで浮世絵の勉強といえば、作品の名称と作者の名前、出来た時期などを覚えるだけで、歴史の好きな私の中でも（浮世絵は）最も苦手としていた分野であった。けれど、今回の授業では、浮世絵の作り方や広まった理由など興味をもって受講できた。

※（ ）は筆者 (M, K 2年)

### 〈コメントC〉

浮世絵に関しては、中学・高校と学んできました。しかし、絵師ばかりに注目されており、版画になるまでのプロセスも気になっておりました。したがって、本日の資料の「浮

世絵をつくる人びと」という一連の流れは僕にとっては有り難いものでした。また、ゴッホによる歌川広重の模写を見て、「これは盗作ではないか」と思わず笑ってしまいました。それだけ欧州に影響を与えたのでしょう。

(S. S 3年)

〈コメントD〉

高校のときは、絵師と絵の名前を覚えるだけでしたが、こうして絵を見てみると、その技術の高さに圧倒されました。浮世絵ができあがるまでにも、絵師・彫師・摺師の3者がいることも初めて知りましたし、今では芸術品ですが、当時は実用品であったということを知りませんでした。小学校の図工での版画を思い出してしまいました。(Y. A 3年)

以上の他にも、さまざまなコメントを頂いた。それらも含めて、学生が浮世絵に関し、どのような知識を持っているのか、浮世絵に対する認識や見方はどうなのかをコメントをもとに分析する。

先ず多くの学生にいえることであるが、浮世絵には肉筆画と版画の2種類あることを知らないようである。「浮世絵版画の祖」とよばれる菱川師宣の代表作で記念切手第一号の「見返り美人図」(絹本に描かれた肉筆画)と、これまた記念切手になった喜多川歌麿の通称「ビードロを吹く女」(版画)との制作上の区別がつかない。一般的には、浮世絵といえば版画のイメージが強いが、浮世絵=肉筆画と思いついでいる学生もかなりの割合でいる。葛飾北斎の『富嶽三十六景』の1枚「神奈川沖浪裏」も、歌川広重の『東海道五十三次』のうちの「庄野」も、すべて肉筆であり、絵師ひとりによって制作された、という理解である。浮世絵版画は、ふつう絵草紙屋とか地本問屋とよばれる版元が企画して、絵師・彫師・摺師の三者による分業によって制作される。モノが生産されるプロセスが軽視されて

いる今日的な風潮が如実に反映していると言える。

次に浮世絵=肉筆画という認識が強いと、浮世絵は高価なものであるというイメージを醸成してしまう。実際、今日においても、著名な絵師の浮世絵版画で保存状態の良いものなら、数百万、数千万円する。浮世絵が高価であるという理解は、浮世絵を美術品・芸術品としてみてしまい、一面的な見方しかできなくなる。ましてや、多くの浮世絵は美術館や博物館で美術品として展示・保存されている。また、浮世絵の美術全集も数多く出版されている。児童・生徒が使用している社会や美術の教科書も美術品扱いである。

ところで浮世絵版画の値段であるが、専門家の間ではほぼ固まっているようである<sup>7)</sup>。大判錦絵(39~39.5cm×26~27cm)1枚が寛政7年(1795)の奉行所の通達によれば、20文以下に規制している。また、天保の改革の折、天保13年(1842)11月には、彩色が7~8色摺りで1枚16文以下とする町触れが出されている。このお触れが守られていたかどうかは疑問であるが、ひとつの目安にはなる。小林忠氏は、「標準的には大判錦絵が20文ということになると、今の週刊誌とほぼ同じ程度であったということになるか。」<sup>8)</sup>と述べている。よくいわれるように、当時(18世紀後半から19世紀前半)かけそば一杯16文であった。

三番目に、ひと口に浮世絵といっても様々な種類や形式・様式があり、用途もまちまちであった。また、浮世絵版画は仕込絵で、いわばレディーメイドである。あらかじめ木版摺りによって、大量に印刷し、絵双紙屋などで店頭販売されていたのである。美術品・芸術作品という考えで制作・販売されていたわけではない。今日でいうならば、浮世絵版画は、ブロマイドやポスター、ちらし(広告)、新聞、雑誌といった情報伝達のメディアと同じようなはたらきをしていた。また、柱絵の

ように柱の節やキズ、汚れなどを隠すために使用された絵もある。きわめて実用的で、日用品の一種であった。はめ絵や鞘絵、さかさ絵、影絵などは遊戯性があり、人びとは絵を見て愉しんでいた<sup>9)</sup>。おもちゃ絵も子どもにとっては、遊び道具のひとつであった。江戸時代の人びとにとって、浮世絵はふだんの生活に必要な日用品であり、消耗品でもあった。それ故に、使い終われば、梱包や燃料となったのである。

一方、肉筆浮世絵は注文画で、オーダーメイドとなる。絵師が一筆一筆精魂を込めて描いて制作するだけに高価で、一般庶民には手が届かない。肉筆浮世絵は、床の間にかけて鑑賞する掛軸や屏風などで需要があった。しかし、明和2年(1765)の錦絵の登場以降は、急速に需要が低下していった<sup>10)</sup>。

四番目に、葛飾北斎や歌川広重などの絵師の名前や代表的な作品は知っているが、制作過程や販売についてはほとんど知らない。これはいわば「受験勉強」の弊害といえるかもしれない。たしかに入試問題の多くは、絵師名と作品名を丸暗記していればできる。このことによって子どもたちは、社会科(歴史)は暗記物であるという意識を強く持ってしまう。実は文化史に限っていえば、大学で日本史を担当している先生方の多くは、文化史に弱いようである。それは文化史を専門に研究している教員が少ないからでもある。日本文化史の授業といっても、実際には宗教史や思想史であることが多い<sup>11)</sup>。このような状況であるから、教科書の文化史関係の記述も、旧態依然としている。教科書の執筆にはさまざまな制約があると思うが、執筆者は児童・生徒が文化史(歴史)に対し興味・関心を抱くような記述にすべく、工夫してほしい。近年は一部の教科書において、その工夫が見られるようになった<sup>12)</sup>。

一方、現場では文化史も授業内容・方法によっては子どもの興味・関心を喚起するもの

である、という実践例を示す必要がある。本稿はそうしたことの助手となればと思っている。

五番目に、浮世絵がマネやモネ、ドガ、ゴッホといったヨーロッパの印象派の画家たちに大きな影響をあたえたことは、よく知られているはずである。この点については、小・中の教科書において、実例を示して記述されている。たとえば小学校の6年生の教科書を見ると、教育出版と日本文教出版の2社は、19世紀のオランダの画家ゴッホが、歌川広重の『名所江戸百景』のうちの1枚「大はしあたけの夕立」を油絵で描いた例を広重の浮世絵と対比して示している。中学の教科書でも東京書籍は、教科書の見返し2ページを利用して、ゴッホが描いた「タンギー爺さん」の背景に見られる浮世絵(6点)を紹介している。扶桑社のは、「読み物コラム」において2ページにわたり「浮世絵があたえた影響」と題して、浮世絵がいかにヨーロッパの画家たちに大きな影響をあたえたかを強調している。しかし、両社の記述はいずれも浮世絵を美術品としてのみ扱っている。日本人が浮世絵を芸術という視点から価値を見出すようになったのは、大正期のことであった<sup>13)</sup>。それまでは、「おおむね懐古趣味者の愛玩物」としか見られていなかったようである。美術史の観点から見ても、「江戸下層階級」の美術という扱いで無視されていた。浮世絵が広く市民権を得たのは、第二次世界大戦後のことである<sup>14)</sup>。

それにしても、欧米の浮世絵収集家が多く存在していなかったならば、浮世絵はゴミ扱いにされ大量に廃棄されていたことであろう。正確な数はわからないが、海外にある浮世絵版画は、国内の3~4倍の数になると考えられている。そして、今日では日本人が国外にある浮世絵を輸入しているような状況である<sup>15)</sup>。

ところで、教科書の浮世絵に関する一面的な見方には、批判的な意見も出ている。「江

戸の人々の生活や文化について何も知らない外国人には、生活に根ざした浮世絵が美術品に見えてしまったのです。その考えが教科書の記述にもそのまま取り入れられているわけです。」<sup>16)</sup>と。正鵠を射た指摘である。浮世絵の授業の際、また教科書の記述にあたり留意すべき点である。

六番目に、浮世絵がヨーロッパに伝わったのは、ペリー来航以降のことであると思込んでいる学生が多い。江戸時代は幕府が「鎖国」政策をとっていたため、浮世絵は海外に伝わっていないと考えたのかも知れない。しかし、実はペリー来航以前から浮世絵は海外に流出していたのである。このことは早くから知られていたようで、手元にある一般向けの啓蒙書である菊池貞夫『カラーブックス21浮世絵』（1963年発行 保育社）を見ても「浮世絵が欧州に渡ったのは非常に早く、さきに記した北斎の逸話（北斎がオランダ商館長＝カピタンと商館付の医者から浮世絵の注文を受けた話）のように北斎生存中に持ち帰えられている」<sup>17)</sup>という記述がある。この話は文政11年（1828）以前のことである。文政11年（1828）にシーボルトが帰国の際に持ち帰った浮世絵は、オランダのライデン国立民族博物館に保管されている。また、彼の時代のカピタンであるステュルレルが持ち帰ったものは、パリ国立図書館にあるという<sup>18)</sup>。

浮世絵が海外に運ばれた古い例としては、美術評論家の瀬木慎一氏自身が知りえた資料によれば、安永8年（1779）に長崎のオランダ商館長として来日したイザーク・ティツィングが浮世絵の最初のコレクターではないかとしている。彼は天明4年（1784）までに合計3度にわたって来日し、カピタンとしての江戸参府を2度行ない、その際かなりの美術品を購入していた。彼の遺品目録には、美人画など10数点の版画が記載されているという<sup>19)</sup>。

小林忠氏も、出島の商館長や商館員が浮世絵を買い集めて国外へ持ち帰っていたことを

指摘している<sup>20)</sup>。海外に持ち出された浮世絵は、貿易品として輸出されたというより、日本の土産物として、また、日本を研究するための材料として持ち帰ったものである。

小林氏はヨーロッパだけでなく、アメリカにも開国以前に浮世絵が渡っていたことも紹介している。寛政11年（1799）6月にオランダ東インド会社雇傭のアメリカ船フランクリン号がバタヴィアから長崎に来航し、艦長のジェームス・デュブロー以下乗組員も出島に上陸した。そして、長崎の町で歌麿や栄之、豊国などの浮世絵5点を購入し、マサチューセッツ州のセ・ラムへ持ち帰り、設立されたばかりのピーボディ・エセックス博物館に寄贈したという<sup>21)</sup>。ペリー来航の50年以上も前に、非公式ながら、すでに浮世絵が伝えられていたのである。なお、「鎖国」下の日本にあって、長崎での貿易を許されていたのは、欧米諸国のなかではオランダのみであった。しかし、オランダ船といっても、アメリカ国籍やフィンランド国籍の傭船がオランダ船として入港したこともある。同様に、中国船といっても、実はベトナム船の場合もあった<sup>22)</sup>。

長崎に来航したオランダ商館長は、貿易の御礼のために江戸により将軍に拝謁する。オランダ商館長の江戸参府である。一行は江戸滞在中は、オランダ人定宿長崎屋に隔離された。この長崎屋に出入りしている27人の「長崎屋定式出入り商人」のリストが残されている。嘉永3年（1850）当時のものである。これを見ると「錦絵熨斗紙類 小伝馬町3丁目 弥兵衛店 萩原屋作助」とある。江戸参府に来たオランダのカピタンや商館員は、こうした業者を通して錦絵や熨斗紙、印籠、キセル、櫛、印判、団扇などを日本のお土産品として購入し、本国に持ち帰ったのである。商館長の江戸参府は、制度化してからでも166回に及ぶ。朝鮮通信使が12回、琉球使節が18回であったことを考えると桁違に多い<sup>23)</sup>。

以上、受講生のコメントの分析を通して明

らかになったことは、学生たちは浮世絵に対してさまざまな点で誤った知識や見方をもっているということである。こうした点を踏えて、浮世絵の授業改善を図ることが必要である。

### 3. 浮世絵のはたらき

浮世絵の主題や種類は多岐にわたり、それぞれの浮世絵によって用途が異なる。作家でもあり、浮世絵の研究者としても知られている高橋克彦氏は、浮世絵は芸術ではなく、「情報と広告と遊び」で、今日の日用品、新聞・雑誌、コマーシャルであると主張している<sup>24)</sup>。幕末明治の浮世絵研究者である稲垣進一氏も、ほぼ同様の見方をしている<sup>25)</sup>。複雑で多様な浮世絵を「美術品」という言葉で括るには抵抗がある。むしろ、浮世絵は芸術である、というような先入観を払拭した方が、浮世絵は理解しやすい。

### 4. おわりに

「浮世絵」の授業を行う際の指導上の留意点をあげ、あわせて浮世絵に関する誤った知識や見方を修正してまとめとする。

まず、浮世絵には肉筆と版画の2種類あることをおさえておきたい。そのためには、木目ははっきりしている絵を用意する必要がある。肉筆浮世絵と木目のある浮世絵版画を準備して比較する。用意する絵は、有名なものがよい。たとえば、肉筆では菱川師宣の「見返り美人図」、版画では葛飾北斎の「富嶽三十六景 凱風快晴」が最適である。二つの絵を対比させて、北斎の絵に木目があることに気付かせ、木版画であることを確認する。

次に、浮世絵版画がどのようにしてつくられたのかを、子どもに問う。絵師ひとりで作ったのか、複数の人が関わったのか予想させてもよい。制作の説明には、喜多川歌麿の「江戸名物錦画耕作」か、この絵をモデルにして描いた3代歌川豊国の「今様見立土農工

商 職人」を示す。このとき、制作に携わっている絵師・彫師・摺師が実際には男性であること（美しい女性でないと売れない）、彫師と摺師の工房は絵のように一ヵ所でないことをつけくわえておく。また、絵師・彫師・摺師の三者は、ふつう町人であることも付言し、化政文化の特色についてもふれておく。

続いて、絵の制作が版画になると、絵の値段がどうなるのかを聞き、その結果、絵の売れ行きがどうなるのかを問う。値段が安くなって、人びとが手に入れやすくなるのに気付かせる。そして、大判の錦絵が今日のお金で何円位か予想させる。数百円位であれば、子どもでも手に入る。実際、子どもも大事なお客さんであった。

次にさまざまな浮世絵を示し、何のために作ったのか、考えさせる。用意する絵は、死絵やはめ絵（寄せ絵）、影絵、鯨絵、柱絵など、子どもがあまり知らない絵がよい。はたして、これらの絵が美術品や芸術作品といえるかどうか考えさせ、追いつめる。ここで子ども達の浮世絵に対するイメージを壊す。これまでの一面的な見方を修正させる。これまでの学習で、似たケースはないか、考えさせるのもよい。縄文土器（火焰土器）が出てきたらしめたもの。

ついで、ゴッホが油絵で模写した「おおはしあたけの夕立」か「亀戸梅屋舗」のいずれかを示して、作者名を聞く。なかなか答えが出てこない場合には、子ども達が知っている外国の画家を言わせる。たいがい出てくる。「糸杉」や「ひまわり」を示してもよい。北斎や広重の浮世絵がヨーロッパの画家に影響をあたえたことにふれる。

さらに、ゴッホはどのようにして浮世絵を入手したのかを考えさせる。「鎖国」下では持ち出せないで、開港後と考えるかもしれない。実は、「鎖国」でも、オランダの商館長らがお土産品として購入し、本国に持ち帰っていたことを説明する。ゴッホの場合は、慶

応3年(1867)のパリ万国博に浮世絵版画が出品された後のことかもしれない、と話す。

多くの子どもがいただいていた浮世絵に対するイメージを改変できるかどうか、浮世絵の授業のポイントになる。

## 注記

- 1) 『日本史広辞典』山川出版社1997年 p.446
- 2) 小澤弘「庶民文化のなかの江戸」(竹内誠編『日本の近世 第14巻 文化の大衆化』中央公論社 1993年 p.7
- 3) 小学校の教科書(6年上 平成16年検定済)と中学校の教科書(歴史分野 平成17年検定済)に掲載されている浮世絵の点数  
6年上: 東書9点 教出13点 光村13点 阪書12点 日文10点 中学歴史: 東書25点 教出13点 帝国30点 清水26点 日文21点 日書10点 阪書17点 扶桑23点  
小中ともに江戸時代のみならず、明治時代に入っても浮世絵が多数使用されている。
- 4) 大久保純一『浮世絵』岩波新書 2008年 はじめに i
- 5) 神田神保町の原書房では数千円で購入できる。
- 6) 埼玉県上尾市中学校の倉持重男氏は、社会科と音楽や美術とのジョイント授業を実施して、授業改善に努めている。〔倉持重男「授業づくりから学校づくりへーみんなの手で授業改善を！」(歴史教育者協議会編『歴史地理教育』2009年9月号p.26~31)〕
- 7) 大久保純一「錦絵の値段」(小林忠/大久保純一『浮世絵の鑑賞基礎知識』至文堂2000年) p.217 浅野秀剛氏も、大判錦絵1枚20文あたりを標準的とみている。(監修辻惟雄・浅野秀剛『すぐわかる楽しい江戸の浮世絵—江戸の人はどう使ったか』 p.115)
- 8) 小林忠『江戸浮世絵を読む』ちくま新書 2002年 p.62
- 9) 詳しくは榊原悟『江戸の絵を愉しむ—視覚のトリック—』岩波新書 2003年
- 10) 藤澤紫「肉筆浮世絵」(小林忠・大久保純一『浮世絵の鑑賞基礎知識』至文堂2000年 p.160)
- 11) 青木美智男「文化史をおもしろく教えよう—化政文芸の教科書記述を中心に—」(青木美智男・木村茂光編『教員になる人のための日本史』新人物往来社 1998年 p.148)
- 12) たとえば光村の『社会6上』(p.77)では、「多色刷りの浮世絵ができるまで」の過程を6枚の図で示している。
- 13) 田辺昌子『浮世絵のことは案内』小学館 2005年 p.141
- 14) 稲垣進一編『図説浮世絵入門』河出書房新社 1990年 p.4
- 15) 前掲注12に同じ。
- 16) 若杉温「浮世絵は芸術品、それとも庶民の生活用品だったのですか」(歴史教育者協議会編『日本史・歴史教科書の争点 50問50答—中学生の疑問に答える—』国土社 2003年 p.73)
- 17) 菊池貞夫『カラーブック21 浮世絵』保育社 1963年 p.125
- 18) 金井圓『近世日本とオランダ』放送大学教育振興会 1993年 p.98
- 19) 瀬木慎一「浮世絵のヨーロッパへの伝播」(『浮世絵と印象派の画家たち展』2001年 日本委員会 1979年 p.222)
- 20) 前掲注8 p.97
- 21) 前掲注8 p.98・99 アメリカ船フランクリン号の長崎来航については、『対外関係史総合年表』(吉川弘文館 1999年 p.830)でも確認できる。
- 22) 岩下哲典『江戸の海外情報ネット』(『歴史文化ライブラリー』207) 吉川弘文館 2008年 p.10
- 23) 片桐一男『それでも江戸は鎖国だったのか オランダ宿 日本橋長崎屋』(『歴史

自由研究

文化ライブラリー』262) 吉川弘文館 2008  
年 p.93~108  
24) 高橋克彦『江戸のニューメディア 浮世

絵 情報と広告と遊び』角川書店 1992年  
p.155  
25) 前掲注14に同じ